

# 日本体育大学大学院

## 令和8年度入学者選抜【出題の意図・解答又は解答例等】

研究科・課程	保健医療学研究科・修士課程
コース	救急災害医療学コース
実施期	I期試験
試験科目	筆記試験（専門科目）

### 【出題の意図】

本設問は以下の能力を評価することを目的とする。

#### 資料読解力

熱中症に関する最新の国際的知見を正確に把握し、背景や課題を理解できるか。

#### 批判的思考力

疫学データの限界や診断の課題を踏まえ、公衆衛生的視点から多角的に問題を考察できるか。

#### 専門職倫理・社会的視点

高齢化・気候変動という社会構造的要因を踏まえ、専門職として適切な予防・対策の方向性を提示できるか。

### 【解答例】

熱中症は予防可能でありながら、発症すれば生命に直結する重大な緊急疾患である。近年、気候変動に伴う猛暑の増加により、熱中症の発生数と死亡数は世界的に急増しており、日本の超高齢社会においても今後さらなる負担増が予想される。特に高齢者は体温調節機能や口渴感が低下しているため、発見の遅れや重症化につながりやすい。現状の課題として、疫学データの偏りと臨床診断依存が挙げられる。アスリートや軍人以外の一般住民に関する大規模研究は限られており、プレホスピタル段階での死亡や見逃し例が統計に含まれないため、実際の影響規模はさらに大きいと考えられる。また、診断が「高体温＋神経症状＋曝露歴」に依存しているため、現場での迅速かつ客観的な評価が困難な場合がある。

今後必要な対策としては、まず教育と啓発が重要である。学校や地域レベルでのWBGT（湿球黒球温度）の活用による活動制限、日常生活での冷却法や水分補給の徹底、地域包括ケアを通じた高齢者の見守り体制などが有効である。さらに、電子健康記録やウェアラブル機器を活用したリアルタイムモニタリングを導入することで、発症予兆を早期に捉えることができるだろう。

結論として、熱中症は気候危機と高齢化の進行により、今後ますます深刻化する公衆衛生課題である。個人の行動変容に加え、行政による制度的対応と社会全体の環境整備が不可欠であり、両者を組み合わせることで初めて実効的な予防が可能になると考える。